

漱石『こころ』私解

— Kの死因をめぐって —

1、不整合性^{注1}について

連載開始時に「先生の遺書」という題で先生の死が読者に知らされておき、作品の結末も、明治の末頃とされる「断片」に「○乃木大将の事 ○是は罪悪か神聖か」などの一句もあり一応の見通しがついていたものといえる。つまり作品の枠組はかなり以前から形成されていたわけだが、思いのほか長編化したという事情を考えると、作品の肉づけの過程での作者の心情、新たに発見されたものに注意することも必要になってくるに違いない。

と大野淳一氏は記している(朝日小事典「夏目漱石」昭42・6)。たしかに作品連載(大3・4・20〜8・11「朝日新聞」)の当初より一定度の枠組みは構想されていたようである。それは連載時の題名だけでなく、例えば先生の奥さんを「静」としたことが、のちの乃木夫妻殉死批判への伏線でもあったことにかがえよう。しかし、一定の枠組みの存在を認めながら、どの程度肉付けされたものであったかについては詳らかでない。また、この肉付けの具体性に関連して、作品の不整合性とも呼ぶべき側面を看過できない。例えば、先生と私との出会いの部分は「私がつぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴れて

*浅田 隆

いた」(上・二)ことに始まり、私が「先生のめがねを拾い出した」(上・三)ことで成立する。この間、西洋人と泳いで「頭が小さく見えるまで沖のほうへ向いて行った。それから引き返した一直接線に浜辺まで戻って来」「井戸の水も浴びずに、すぐからだをふいて着物を着て、さっさとどこかへ行ってしまった」(上・二)ことが私の興味を惹起し、翌日はと見ると、先生は一人だけで例の調子で泳ぎ始める。そこで「私は急にそのあとが追いかけてなくなつて」「抜き手を切ると」「先生はきのうと違って一種の弧線を描いて、妙な方向から岸のほうへ知り始め」(上・二)る。「その次の日にもまた同じ事を繰り返した」「先生の態度はむしろ非社交的であった」(上・三)と説明がある。ところが作品を読み終えた段階で気付くのは、作中に西洋人と交わる先生はここ以外になく、西洋人が「もう鎌倉にいない」(上・三)にせよ、この西洋人についての説明はおろか、出会いの場面で西洋人と一緒にあったことには全く触れられない。西洋人の登場については岩上順一氏の「孤立した知識人」の表象とする解釈(漱石入門 昭34・11中央公論社)もありはするが、やはり唐突さはまぬがれまい。

明治末期に時代は設定されている。当時の日本にどの程度の西洋人が居たか不詳だが、「私がつぐ先生を見付け出したのは、先生が一人

の西洋人を伴っていたからである」(上・三二)とあるように、西洋人の稀少性・西洋人と行動をとるに日本人の稀少性が、浜辺に群れる海水浴客の中から面識も何も持たない人物(先生)への私の注意を惹起した理由として設定されているのである。おそらく作品冒頭に述べられる私と先生との出会いにかかわるこの部分は、当時の読者に何の不自然さも感じさせなかったに相違ない。ところが逆に、西洋人の存在によって私の先生に対する注意が喚起されたと同様、読者もまた西洋人や西洋人と泳ぐ日本人に対する興味を、それもかなり濃厚な形で喚起されたい。また「日本人にさえあまり交際をもたないのに……云々」(上・三三)という先生の弁明はあるにせよ、当初に描かれた諸条件から、社会性・社交性を持つ人物像を、あるいは語学に長じた快活な人物像を結像させたのではないが、現実の先生像として後に読者の前に示されるのは「牢屋のうちじっとしている事」(下・五十五)を自らに課する、言わば隠逸的な人物なのである。となると読者の側には、連載の回が重なるにつれ、一種の戸惑いが生じたと思われる。漱石もこのことを慮ってか、一人で泳ぐ先生のとを迫る私を拒否するかの如く「きのうと違って一種の弧を描いて、妙な方向から岸のほうへ帰り始め」(上・三二)る先生を描き「先生の態度はむしろ非社会的であった」(上・三三)と、先生像について「むしろ」と強調しつつ修正せざるを得なかったのかもしれない。しかしそれにしても、この先生像に対する修正は西洋人が持つイメージ喚起力の強さのため、決して成功しているとは言い得ない。

また、出合いの場面で重要な媒介となる「めがね」にしても、前引の部分以外には、お嬢さんへの恋心に苦しむ若い日の先生が「細い石橋を渡って柳町の通りへ出る」あたりのぬかるみ道で、Kの後に「心持ち薄赤い顔」(下・三十四)をしてついで来るお嬢さんの姿を発見す

る場面に「近眼の私」とあるにすぎない。ところが、例の、Kの自殺を発見する場面では、「ふと目を覚ました」先生は「床の上にひじを突いて起きあがりなら吃つとKの室をのぞき」(下・四十八)見る。しかしこの折の先生の目は恋い焦がれつつある女性が近接するまでそれと気付かないような「近眼」という印象からは遠いようである。

以上は人物形象にかかわる不整合とでも呼ぶべき部分だが、人物形象という意味では形象の一貫性の欠如と考えることもできる。

漱石は「田山花袋君に答ふ」(明41・11・7)『国民新聞』の中で「拵へものを苦にせらるるよりも、生きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだろう。」「拵へた作者は一種のクリエーターである。拵へた事を誇りと心得る方が当然である」と述べている。この趣旨からさきの西洋人やめがねを思うとき、それは先生と私との出会いという「脚色を拵へる」にあたって、その出会いを自然として読者に説得力を持たせるための小道具(ディテール)であったとも言える。論旨からそれるようではあるが、作品「門」(明43・3・1〜6・12)『朝日新聞』における「文庫」(七)は野中宗助と家主坂井とを結びつけ、さらには宗助がかつてその人の妻であったお米を奪った相手・安井の影におびえ禅門をくぐるという方向へ作品の流れを向ける重要な展開点として描かれる。ある夜泥棒が盗み出した「文庫」を捨てるといふ偶然がなければ、作品は「門」という主題に向かって動き出し得ないという点で、そこには「拵らへた脚色」が感じられよう。また「行人」(大1・12・6〜2・2・4)『朝日新聞』における二郎とお直の和歌山での一夜(兄・二十八〜三十九)にしても、台風という「拵らへた脚色」によって成立したものである。しかし、いずれの場合も読者はそこに殆んど不自然を感じないまま、漱石のさり気なくそれでいて緻密な文章によって、漱石が意図する流

れの方向に乗せられていくのである。と同様に、西洋人とめがねとによって、読者は先生と私との出会いをいかにもありそうなこととして受容する。一度この出会いを受容した読者は、漱石の思うがままに「私」の語り(回想)の世界に入っていくのである。以上のような作品制作にかかわる状況や細部の設定法にかんする問題の延長上に「ころ」の「明治の精神」(下・五十五)を置いてみると、Kに対する先生の罪意識の問題を主たる基調として進んで来た作品の流れが、突如、明治天皇や乃木殉死を媒介に、ちょうど「門」の宗助の前に「文庫」が降って来たような形で「明治の精神」の方向へ流れがねじ曲げられていることに気付くのではないか。

平岡敏夫氏は荒正人氏・柄谷行人氏らのことばを引きつつ以下のよう述べている。

贖罪の物語とのみ読むことは一方、殉死の物語と読むことと矛盾するが、荒正人氏は「異なった視点から眺めれば、贖罪と殉死は全く性質を異にしたものである。両者は全く関係がない。」として関係のない行為を強いて関係づけるところに「ころ」の実験があり、「ころ」の分り難い部分、不透明な箇所は、この点にある。にもかかわらず、不思議な魅力を帯びているのはなぜであろうか。」と述べている。正当な問題の立て方であろう。最大の難関と思われる先生の自殺についても、「ころ」の先生がなぜ死ななければならぬのかということ、おそらく作品そのものからは理解できないはずだ。」と柄谷行人氏はいつている。作品そのものの脈絡をたどるかぎり、解きえぬ何かがあることを実感したのちのことばだと思うが、それを「表現することなどできない恐ろしいこと」としての「生そのものの危機」、あるいは「畏怖する人間といったところにつなぐのはひとつの解決であり、難解に苦しむ者にとっては感銘と

安堵を与えるといわなければならないけれども、やはり作者によって表現されたものをいかに読みぬくかというごく当然の道を行く以外に方法はない。

さらに「あくまで表現されたものを通して」作品の読みを深める以外にないことを強調している「漱石序説」 昭51・10 堀書房。この辺に「ころ」論の最大の難関があると言わねばなるまい。

さてそれでは、所謂「贖罪」と「殉死」との不整合性は全く関連づけられることができないのだろうか。諸家の努力もこのあたりに重点が置かれていと言っても過言ではないが、例えば以下のような点から考えても、漱石にとって、決して矛盾するものと考えられてはいなかったことが想像される。

「先生の遺書」に続いて連載される予定になっていた志賀直哉(時任謙作)が突然「朝日新聞」への連載を断つて来るという突発事態が出来(大3・7・13付山本松之助・直哉宛書簡)し、急きょ「先生の遺書」完結後の対応策をこうする一方、「先生の遺書」そのものを「引張」(大3・7・15付山本宛書簡)という形で急場をしのぐということになったのは周知のとおりである。このようなことの結果として、つまり作品を引きのばさねばならない事態の結果として右のような不整合性が生じたという疑問も生じる。しかしながら、既述のように先生の奥さんの名前を「静」としたのは連載九回目であり、私の父の病状との関連で明治天皇の崩御や乃木殉死を扱ったのは連載百十回中の前半部分であった。しかしすでに作中に設定した状況や細部にあとから新たな意味を付与して発展させるといふこともあり得ようから、奥さんの名前や天皇崩御・乃木殉死といった伏線によって「明治の精神」への流れは早い段階から予定されていたとするのは早計かも知れない。

しかしながら、連載の引きのばしに関しては七月十五日付山本松之

助宛書簡に「可成『先生の遺書』を長く引張りますが今の考ではさうくはつづきさうもありません、まあ百回位なものだらうと思ひます」と見える。大雑把な概算でしかないが、ちょうどKと先生の房総旅行を書いていた頃、漱石は百回を目途に延引しようと考えたことになる。また、志賀の辞退ということがなければもう少し短いものになった可能性もある。志賀の辞退の穴を埋めるべく漱石は鈴木三重吉に「君一つ十回もしくは十二回位のを直ぐ着手して出来る丈早く作ってくれ玉へ、其上あとへ出る二三人の人をこしらへてくれ玉へ」(7・17)とも依頼する。交渉の結果鈴木以下武者小路・長田幹彦・小川未明ら十一名が予定者としてリスト・アップされた(7・22付三重吉宛書簡)が、彼らの執筆は遅れがちで、七月末までに目鼻のついたのは武者小路のみという状態であった。しかし漱石はその段階で「私は百十回程で仕舞になります、二三日前に書き上げました」と三重吉に書き送っているのである(8・3付)。後継の執筆予定者の原稿の見通しが未だ十分に立っていない段階で、しかも、新聞社の方には引きのばしを歓迎する意嚮のあることを知りながら、「早く小説を書いてしまつて外の事がしたい」(7・28付 森園月宛書簡)という気持ちで漱石が抱いていたにせよ、漱石は脱稿した。以上のような脱稿時期の背景の事情を考えると、作品は漱石にとって、十分に完結した空間を結び得たという判断があったと想像せざるを得ない。となると一見不整合とも思われる「贖罪」「殉死」さらには「自由と独立と己れ」といった諸点について「作品そのものからは理解できないはず」とは言い得ず、「作品そのもの」の中に契合点を模索せねばならないことになる。

2. 「下・四十三」について

Kは先生が奥さん(母親)に結婚の申しこみをする前に、「覚悟、

——覚悟ならぬ事もない」(下・四十二)という自殺の覚悟を抱いていた以上、先生の裏切り、そのことによる贖罪の意識のみで作品を理解することはできない。

と平岡氏(既出)は言いつつ、田中保隆氏の「先生の親友Kは『先生の裏切りの故』に自殺したのだろうか。そうではないことを漱石はいくつかの伏線を張って明らかにしているのではないか」(書評「熊坂敦子著『夏目漱石の研究』」昭48・10『日本近代文学』)という説に対し「必ずしも割り切れぬものがありはしないか。つまりK殺しの自覚は消えぬはずだからである」と注記し、「あまりに自力的な信条(中略)を裏切つてまで『自己本位』に終始し、さらには自殺まで覚悟していながらおめおめと生きながらえざるをえなかった自己へのたえがたい屈辱感として受けとるべきであろう」と結論づけている。

また熊坂敦子氏(『夏目漱石の研究』昭49・2 桜楓社)は、襖が開けられるのは、Kが先生に話しかけるときである。「私は程なく穏やかな眠に落ちました。然し突然私の名を呼ぶ声で眼を覚めました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其所にKの黒い影が立ってゐます。」(同四十三)と、黒い影が象徴するように、襖が開けられたのは、Kが自殺の準備をするために先生の様子を確かめたいように受けとれる。これはKが自殺した夜の状態と、見合っていると述べている。

「こころ」に限定的な特徴というのではなく、漱石の作品の多くに共通することではあるが、彼は伏線を張る妙手である。その伏線は当初より計画的に張られたものなのか、連載の過程で、すでに描き込んだ内容に重大な意味を持たせるといふ形であったのかは詳らかでない。しかしいずれにせよ完結した作品空間の全体を眺めるとき、「こころ」

においても、巧妙な伏線の存在を随所に認めるのである。

周知のことではあるが「私は世の中で女というものはたった一人しか知らない」(上・十)につづく「われわれは最も幸福に生まれた人間の一对であるべきはずです」という先生のことばに対し、私の心境として、このことばを発した「先生の態度のまじめであったこと、調子の沈んでいたのは、今だに記憶に残っている」と、読者が読み飛ばしそうな言葉への読者の注意を喚起するのである。さらに「私の耳に異様に響いた」こととして「先生はなぜ幸福な人間と言いつつ、あるべきはずでないと断ったのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であつた」(上・十)とも記す。もとより先生夫妻の背後にはまだ語られていない重大な過去が秘められているわけで、読者は私の心境として語られるこの部分によって、漱石が意図する方向へさらに一歩踏み込むことになる。

さらに一例を示せば、私の父親の病気に関する先生との会話の部分で(上・二十一)「大病はいいが、ちょっとした風邪などはかえつていやなものですね」「私は病気になるくらいなら、死病にかかりたいと思つてる」と先生に語らせ、こうした先生のことばに対し「私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた」と記してもいる。私が「格別注意を払わなかつた」と記すことで、読者は注意を喚起されるだろう。さらに「恋は罪悪ですよ。わかつていますか」(上・十二)も同じことである。

右は一部の例にすぎない。このような漱石の技巧については周知のとおりである。が、こうした文章の特徴を念頭に置くと、「下 先生の遺書」の「四十三」「四十八」の関連、特に「四十三」に描かれる先生の心の動揺には抜き差しならない重要性があることに気付くはず

である。

田中氏は「Kの自殺への傾斜がすでに房州旅行の時にみられることを、暗示している」とする。おそらくそれは「ある時私は突然彼の襟首を後からぐいとつかみました。こうして海の中へ突き落としたりどうすると言つてKに聞きました。Kは動きませんでした。後ろ向きのまま、ちょうどいい、やつてくれと答えました」(下・二十八)という出来ごとのあたりに「Kの自殺への傾斜」を認めるのであろう。しかし、田中氏はそこでいう「傾斜」がどの程度のものであるかについては触れていないし、また「自殺」と言つて良いかどうかについても疑問が残る。またKの恋という点に注目した場合「打ち明けなければいられないほどに、彼の恋が募つて来た」(下・三十六)結果としてKが先生にお嬢さんへの恋心を打ち明けたのは冬の夜のことである。またそれ以後もう一度上野公園でKは先生に自己の迷いについて「進んでいいか退いていいか、それを迷うのだ」(下・四十七)と説明する。この間ほどの程度の時日が経過したのか詳らかでないが、房州旅行が夏のことであつてみれば、旅行以来半年ばかり経過した段階でKの恋心が「打ち明けなければいられないほどに募つて来た」とするのが自然だろう。

そこで「Kの自殺への傾斜」だが、Kが養家との問題で「復讐したのは一年生の時」(下・二十二)で、以来Kは自活の道を歩み、厳しい条件下に「今までどおり勉強の手をちつともゆるめずに」(下・二十一)「道のため」「精進」(下・十九)する。が、一方ではそのような強い意志を持ちながら「自分だけが世の中の不幸を一人で背負つて立つていような事を言」(下・二十二) ったりもするようになる。それは「一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になる」(同)頃のことであつた。「意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだ」(同)と強情に主張するKに対して「しかたがないから、彼に向かって至極同感

であるような様子を見せ」（同・傍点筆者）先生はKを自分の下宿に引き取る。つまりこの段階ですでにKの心の内にKの意志に反する、理想を裏切らんとするものが萌しており、こうしたKを更生させるべく、先生は「いっしょに向上の道をたどってゆきたい」と「彼の前にひざまずく事をあえてした」（同・傍点筆者）である。Kは「道」「精進」ということを口にしながらか、そしてまた「口で先へ出たとおりを、行為で実現しにかか」（下・二十四）と、まさに意志の力で「倫理」を生きる人として存在しながら、さらには「ややともすると精神と肉体とを切り離し」「肉を鞭達すれば霊の光輝が増すように感ずる」（下・二十三）ような生き方の中にありながら、逆にKは、軽視したはずの「精神と肉体との融合」からまさに復讐されようとする状況にあり、「感傷的」で「神経衰弱」（下・二十二）の状態に陥りつつあった。房総旅行はそうしたKの心が少し「打ち解け」（下・二十五）はじめた段階ではあったが、愛や恋といった人間的な「血潮」（下・二十九）のぬくもりに関しては、やはり「変に高踏的」（同）であることに変わりはない。このように見てくると、Kが海岸で「ちようどいい、やってくれと答え」（下・二十八）たというのも、決してお嬢さんへの「募る思い」が直接の原因とは考えられず、むしろ「感傷的」で「神経衰弱」に陥った者がときに抱く破滅への傾斜と見るのが妥当なように思う。もちろん感傷的な精神状態の中に、Kの意志に反してお嬢さんの影がしのび込みつつあったと考えるのも不自然ではない。というの、「恋に上る階段」（上・十三）としての「淋し」（上・七）と考へることも可能だからである。Kの「高踏的」な態度が「変に」と形容されていることを思うと、先生の「人間らしい」（下・三十一）ということばにKは「血潮」のぬくもりを感じながら、精神的向上を目ざそうとする意志のゆえに意識的に「抽象的な理論」（下・二十九）に逃

げたと読めないこともない。したがってこの房総旅行の段階ではまだ「自由と独立とおのれ」（上・十四）に満ちたKなりの世界が動揺のうちにも一応堅持されていたと言えよう。しかしまたその一方に、自己の意志によって自己の全領域を支配しようとしているKの口から「ちようどいい、やってくれ」ということばが出るのは少々矛盾と言わざるを得ず、自己の生の抹殺という最も重大な問題を自ら決することなく、他に委ねても良いとする態度には、やはり「自由と独立とおのれに充ちた」生が抱く「さびしみ」（上・十四）に領されつつあるKを見ることが出来る。ちようどそれは「私」と出会った当初の先生が抱く「私は病気になるくらいなら、死病にかかりたい」（上・二十一）といった、未だ決断にいたらない漠然とした死への願望と重なるものと言うことができるだろう。

田中氏の推論にこだわらざるを得なかったのは、Kが自らの手で自らを死にいたらしめんとする決断を心に抱いたのが何時かを筆者なりに確認したかったからである。

さきに熊坂氏の説を引き、「下」の「四十三」「四十八」は抜きさしならぬ重要な関係を持つと言ったが熊坂氏もこの点に注目し「Kが自殺の準備をするために先生の様子を確かめた」と解釈する。しかしここで「自殺の準備」とは具体的に何を意味するのだろうか。毎夜遅くまで起きているKにとって「必要な事はみんな一口ずつ書いてある」（下・四十八）遺書を書くことにはさしたる雑作もないと思われる。また自殺そのもの手段も「小さなナイフで頸動脈を切る」という、これもまた準備と呼ぶべき過程を要しない方法で果てている。となれば、ここでの「準備」とは決行に先きだつて隣室の様子をうかがうこととひそかに別れを告げることを指すと考えられる。単なる仮定にすぎないが、もしこの日の夜先生が自覚めなかつたならば、Kはこの夜

のうちに果てるということもあつたかも知れない。ところで、この夜とはどのような夜だったのか。

最初にKが先生にお嬢さんへの「切ない恋」(下・三十六)を打ちあけたのはこの日ではない。この日先生は図書館で調べものをしていった。そうした先生をKは散歩に誘い出し、上野公園で「どう思う」(下・四十)と過日告白したことについて漠然とした質問を投げかけて来たのである。この「どう思う」という問いには二様の意味が込められており、一方は恋愛の淵に陥った者をどんな目でながめているかというところ、もう一方は「進んでいいか退いていいか」という意味であった。「道学の余習」(下・二十九)とはいえ、道に精進するKの前に「一種のはにかみ」(同)の結果打ち開けられないままに悩み続けた先生に比べKはあまりに無邪気というべきであろうが、Kの「どう思う」ということばに込められた二つの意味は、実はKに対して秘めていた先生自身の思いでもある。つまりKが保管していた「要塞の地図」(下・四十二)とはそのまま先生のそれでもあつたわけである。この後先生は「精神的に向上心のないものはばかだ」(同)と二度にわたって切りかけるが、これに対しKは最終的に「覚悟——覚悟ならぬ事もない」(下・四十二)と「ひとり言のよう」に「また夢の中の言葉のよう」(同)に答える。Kが先生の部屋との間のふすまを「二尺ばかり」開け「もう寝たのか」と問いかけたのは、このようなことがあつた日の夜なのだが、二週間後の夜、Kの自殺を発見したのは「Kと私の室との仕切りのふすまが、このあいだの晩と同じくらいあいて」(下・四十八)いたからでもある。紙幅の関係で細かく触れ得ないが、この折の「彼の声はふだんよりかえって落ちついていたくらいでした」という部分には不思議な響きを感じざるを得まい。要はKが夜中にふすまを開けて「もう寝たのか」と呼びかけたにすぎないありふれた出来事

であるにもかかわらず、漱石は「かえって」とも「ふだんより」とも記す。ということはKのその行為が「ふだん」のKの行為とは異なつた特別な行為であることを暗示し、それを「ふだん」と比較して(特別な行為であるにもかかわらず)「かえって」と表現しているのである。このような文章表現上の暗示だけでなく、先生が深夜のKの行為に異常なこだわりを示していることが描かれている。そしてこのこだわりに触発される形でKの「覚悟」ということばに対する先生の「最後の手段」(下・四十四)を意味するのではないかという解釈が示されるのである。いささか冗長に流れるが、もう少し作品に即しつつKの死因をめぐる問題を検討しておきたい。

3、閉ざされた自我

先生がKに対して「精神的に向上心のないものはばかだ」と切りかけた背後には、Kという人物を知悉した先生の計算があつた。それはKの「虚に付け込んだ」(下・四十一)形ではあるにせよKが「精進」ということばに負わせた意味のすさまじさ、つまり「男女に關係した点について」の「禁欲という意味」のみならず「道のためにはすべてを犠牲にすべき」であり「摂欲や禁欲は無論、たとひ欲を離れた恋そのものでも道の妨害になる」というのが「彼の第一信条」(下・四十二)であり、それが精進の内実であることを先生は了解していた。また彼のこの信条は単に信条の域にとどまるのではなく、先生が知る限りKの全人生の歩みはこの信条に捧げられていた。このことを知悉する先生は決してKと対決するためにではなく、「私の利害と衝突する」(下・四十二)おそれが出て来たKに対し「急に生活の方向を転換」するのではなく「かえって今までどおり積み重ねてゆかせようとした」(下・四十二)のである。とは言えそれは純粹なKへの情から出たので

はなく、あくまでも「利害」関係の打算であつたことも認めねばならない。そして看過してならないのは、恋という重大な関心事（自我の問題）をめぐってどこまでも自己を主張しようとする人間像が先生には見られないということである。そこには「道学の余習」や「はにかみ」があるにせよ、内面に「充ちた」「自由と独立とおのれ」（自己本位）の精神が外に向かつてあふれ出ることのない、他との対決を回避するひよわな自己本位があるにすぎないということである。つまり他との対決とは自己以外に存在する他を自己同様に独立した人格を有する者と認め得たときのみ可能なことであろう。先生は「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」（下・四十八）と感じるが、荒正人氏が「智恵と才覚という視点に立てば、先生は、人間としても勝っているのではないか」（『日本文学全集16 夏目漱石集』昭49・11 集英社）とも言うように自己の心の「要塞の地図」を無条件に受け渡すKこそ無邪気にすぎるのである（Kも先生を人を恋し得る独立した人格を持つ人間（他者）と認めていない証拠と言える）。にもかかわらず「人間として負けた」という考えを抱く先生には、個の内閉じ込めのみで他との共通の場に出て生動しようとする積極的な自己本位（自我）を認めようとする態度は見られない。

山崎正和氏（『林しい人間』昭52・11 『ユリイカ』）は、
彼らの自由は他人を支配する自由ではなく、いかなる他人からも支配と制肘を受けない、といふ意での自由にすぎないといへるでせう。じつは、他人を支配するといふことは、そのための妥協や取り引きを含むものであり、その範囲において、逆に他人から支配や制肘を受けることを意味する

と述べているが、端的に言えば、さきに述べた共通の場とは社会のほゞであり、「自由と独立とおのれ」（上・十四）を自我ということばに

置きかえることが可能ならば、社会とはその自我がそれぞれの立場を主張しつつ調和を見出す場であるとともに、調和を見出した自我はその自我の内に社会（他者）を抱き取ることとなるはずである。しかし「漱石の主人公は、つねにさうした受動性を潔癖に拒絶してゐる」（山崎）わけで、他の支配を潔癖に排除するために他を支配しようともしないのである。彼らの自己本位（自我）が持ち得る共通の場とは、この作品においては一人の女性を対象とした恋の場であつたはずだ。が、Kはあまりに無邪気に共通の場に登場し、一方先生は自我を共通の場を開こうともしないのである。以上のような前提においてはじめて「人間として負けた」という先生の思いは十分に重い響きとなり得たと思われる。別な方面より見ると、Kは閉ざされた世界において精進し続けて来たが、Kにとって、その閉ざされた世界から非常に無邪気な形においてであるにせよ社会に向けて不十分ながら小窓を開ける試みが、恋を先生に打ち開ける行為であつたと言えよう。しかしこのKの無邪気な試みは対決を回避しようとする意図を持った先生の「精神的に向上心のないものはばかだ」という言葉によって押し戻されてしまった。が、Kにとってこのことは単に共通の場から排除されたということではなく、必然的に自己の無邪気な行為をそれまで遵守してきた「信条」に立つて対象化せざるを得なくなり、さらにこの行為が持つ重大性を自覚せざるを得なくなる。房総旅行において、Kとの話は「いつも抽象的な理論に落ちてしまっただけでした」とあるが、抽象化とは言わば現実個別的に存在するものごとの純化作業と言えらる。そしてKは個別具体的なものごを現実存在そのものの様相においてとらえようとする人物として描かれているのである。となると「それから」（明42・6・27〜10・14 『朝日新聞』）の「代助」を想起せざるを得まい。つまり「所謂処世上の経験程感なものはない」（二）

「麵麩を離れ水を離れた贅沢な経験」以外の経験を「劣等」(二)と考へ、生きる為の現実社会における営為の一切を拒否する価値観であり、さらに「道楽と職業」(講演 明44・8・13)にも見られる職業観・社会観に通じるとも言える。つまりKは現実社会の個別具体的なものと(「劣等」な世界)に目をつむり、ひたすら閉ざされた自我の世界で精進することを第一の信条としておりながら、恋を媒介に閉ざされた純粹の世界から個別具体的な「劣等」の世界に歩み寄ろうとしている自己に気付かざるを得なかったということになるのである。

Kが遵守し続けて来た世界とは純化された孤高の世界であり、他を潔癖なまでに排除した世界である以上、必然的に先生が言う「淋しさ」が付きまとう。さらに「淋しさ」のゆえに孤高の世界から出ようとしていた自己を発見させられることは、意志の力だけを頼りとして道のため精進を重ねて来たKにとって、その意志の力に対する疑問を抱かざるを得ないこととなるはずである。先生はKの死因について遺書の中で「失恋のために死んだ」のではなく「たった一人で淋しくってしかたがなくなった結果、急に所決した」という「疑い」(下・五十三)を持つようになったと記している。おそらく先生の想像どおりであったにちがいない。したがってKの遺書に「お嬢さんの名前だけではどこにも見え」ないのは「Kがわざと回避した」(下・四十八)のではなく、平岡氏が「もともと書く必要がなかったこと」と言うように、すでにこの段階では、Kは再び純化された孤高の世界にひたすら閉じこもり、ひたすら自己を凝視することで心は満たされていたと思われる。したがって個別具体的な人間存在としての恋とその対象たるお嬢さんは、遺書を認めつつある状態でのK、つまり純化された孤高の世界に立ち戻ってしまったKには純化・抽象化された形において把握され、そこにKの遺書の「薄志弱行」ということが記されねばならない根

拠があったと考えるべきであろう。

Kがお嬢さんの母(奥さん)から先生とお嬢さんとの婚約を知らされたとき「Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしい」(下・四十七)と記されている。もしKがこの婚約を知らないうまに逝ったなら「ここ」は案外平易な作品であったかも知れない。しかし、Kは「この最後の打撃」を先生が当時想像したほどに大きな衝撃として受け取ったか否か疑わしい。と言うのは、さきにも述べたようにKはすでに先生の「精神的に向上心のないものはばかだ」ということばによって、閉ざされた孤高の世界に立ち戻っており、ここでは他を裏切ることが倫理上の問題とはなり得ても、他に裏切られることは問題となり得ないはずだからである。

さて、Kの死因について失恋や友人の裏切りによって自殺したのではなく閉ざされた自己本位(自我)が自ら招いた破滅であることを述べた。このような読み取り方は、先生の贖罪感(罪意識)と「明治の精神」との関係を考えるうえで最も重要な部分ではないかと思う。仮定の上に立った推論は意味を為さないかも知れないが、例えば、「精神的に向上心のないものはばかだ」と先生が切りかけた日の夜にKが自殺していたならば、あるいは、奥さんから先生とお嬢さんとの婚約を教えられないままに自殺していたならば、果して先生の罪の意識は軽減するか否か、となると、おそらく否と答えざるを得ないだろうかである。

さて、主としてKの精神(意識)状況とのかかわりの中でKの死因を分析してみたが、「ここ」における先生の贖罪感と「明治の精神」とのかかわりについては述べることができなかつた。紙幅が尽きたので、稿を改めて述べたいと思う。

注

- 1、佐藤泰正氏は「彼岸過迄」「行人」「こころ」について「前半と後半がうまくつながっていない。歪みというか、割れ目があると言われる。しかし実は、この割れ目、この亀裂のごときものこそ、漱石文学の本髄をあらわすもの」(『夏目漱石』「こころ」昭47・6「解釈と鑑賞」と言う。これは主要人物が途中で入れ代わることについての指摘であるが、「本髄」か否かは別としても、筆者が言おうとする「不整合性」とも無関係ではない。
- 2、恋をする以前の「感傷」や「神経衰弱」といった精神状態とそれ以後の精神状態を連続的に同質にとらえることには無理がある。少なくともKにとって恋は自己の「第一信条」に反するものであったはずなのだから。
- 3、Kは「小さなナイフで頸動脈を切って一息に死んでしまったのです」(下・五十)とあるが、「石黒男將軍の最後を語る」という『大阪朝日新聞』(大1・9・17)の記事によると、乃木大將も「腹を切ってから咽喉を突く時には、刀刃を内に向けて咽喉部を右より刺し込んで左の後に貫き頸動脈管を切断して絶息した」との所見が見える。単なる深読みにすぎないかも知れないが、「奥さんの名は静といたつた」(上・九)とことさらカッコ内に注記しており、この、奥さんの名前「静」が乃木夫人と同名に設定されているということから、乃木大將が夫人を追つたに似たことへの批判が作品にこめられていることを指摘する評家もある。そうした視点を延長させるならば、Kが乃木大將と同じように頸動脈を切って果てるという設定にも、Kの生と乃木大將の生とを重ねようとする何らかの思わくがあったのではないかと推測される。
- 4、行為自体は非常に単純で、またありふれてもいる。にもかかわらず、翌朝になって「昨夕の事を考えてみると、なんだか不思議でした」「夢ではないかと思ひ」「Kに尋ねてみると事実だと答える。「なぜそんなことをしたのかと尋ねると」特に返事もせず、「近ごろは熟睡ができるのか」と逆にKの方から尋ねたりもする。通学途上、なお「氣に掛つている私は」「あの事件について何か話すつもりではなかったか」とただし

たところ「Kはそうではないと強い調子で言い切る。このあたりの漱石の筆勢にはただならぬ意味がこもっているように思われる。それは二つの方向において考えられるのだが、一つは、昨日の上野公園で先生が「精神的に向上心のないものはばかだ」と言ったのに対し、Kが最終的に口にした「覚悟」ということばが持つ重大な意味を、先生は無意識裡に探りあてていたため、Kの一見とりとめない行為の内に重大な意味を読みとっていたという方向。もう一方は、ふすまを開けて「もう寝たのか」と問いかけたKの態度の内に一種の殺気めいたものが現実には漂っていたということ。いずれの場合であるにせよ、先生はKの昨夜の行為に触発されKの「覚悟」という言葉の内実として、「すべての疑問、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段」を連想しているのである。

- 5、Kがもし「下・四十三」、つまり上野公園で「覚悟」ということばを口にした日の夜死んでいたとしても、先生は罪の意識から解放されないのではない。山崎正和氏が「先生」がみづから責めたほど、そんなに深刻な罪であったとは考へられませんが、「自己を処罰したいといふ理由のない衝動に駆られ、そのためにありもせぬ罪を探し求めているやうに見える」(既出)とも言われるように、たしかに先生の倫理にはそのように感じられる面がある。Kがお嬢さんへの恋を告白したのに対し、先生はKが「急に生活の方向を転換」するのではなく「かえって今までどおり積み重ねてゆかせよう」として「精神的に向上心のないものはばかだ」というKの「信条」を投げかえしたわけではあるが、先生は決して純粹ではなかった。つまり、「私の利害と衝突する」ことを回避するために自己の内面(お嬢さんへの恋)をKに隠したまま「彼の虚に付け込んだ」わけである。作品に描かれている条件と右のような場合と、先生にとってどれほどの違いもないのではないか。換言すれば、Kを出し抜いての婚約ということが作品に描かれてはいるにしても、先生の罪意識とは、右に述べたような、現実的・具体的な裏切りとは異なったところに設定されているのではないか。

A Private Essay on “KOKORO” of Soseki Natsume
On the Cause of the Death of Mr. K.

Takashi ASADA

Summary

“KOKORO” is very hard to understand. This is mainly due to the difficulty to understand the meaning of “Meiji-no-Seishin” In this essay we will present some discussions on “Meiji-no-seishin.”